

老年教育における美術教育内容の研究 I

— 記憶画に関する公開講座及びデイサービスにおける ワークショップの実践から —

高橋 文子

A Study of Art Educational Contents for Gerontological Education part I
: Based on Practices of Memory Drawings in the Open course and Workshops at Daycare.

Fumiko Takahashi

要旨

これまで福祉や医学等の領域で社会的弱者の視点で捉えられることが多かった老年学に、「人間の潜在能力を生涯にわたって拓く」教育的本質を加えて想起されたのが教育老年学である。本研究では、まず、これらの枠組みから老年美術教育を論考することを試みた。しかし、ポジティブ・エイジングを背景とした大きな社会学的な枠組みに止まり、老年美術教育内容の理論的な体系化には至っていないことを確認した。老年美術教育の研究対象として、2017年11月に実施した記憶画公開講座と、2017年～2018年に行ったデイサービスにおけるワークショップの2実践の教育内容を検討した。公開講座は、手本を用いた遠近感と重色の技能の習得を目指し、詳しくは①近景、中景、遠景と分けて場を印象的に表す力 ②クレパスや色鉛筆の重色の効果を工夫する力 ③場面に込められた詩情を感じ取り表す力であった。また、デイサービスの教育内容は、「色や形の組み合わせやタッチの仕方、主張のある心地よい表現が生まれることを体感する」と総括した。特に、「上手⇔下手」を基軸とした既成概念をほぐす必要があり、プログラムの工夫で描画材や素材との一体感が生まれ、それらの一体感は、微細な方法論の獲得をもたらした。老年教育における適切な美術教育内容の体系化のためには、色と形等の造形要素だけでなく、創作の心地よさを生み出す素材との一体感を重要な指標として示した。

キーワード

老年美術教育、教育老年学、教育内容、記憶画 素材との一体感

1. 序

(1) 研究の目的

今日の高齢化及び生涯学習社会への移行を受けて、老年教育は、美術教育においても多くの示唆を

必要としている。成長とは逆の、加齢による衰え行く諸条件の中で、高齢者の美術的学びを捉えるには、従来の学校教育を基盤とする美術教育とは異なる枠組みが必要である。これまで福祉や医学、看護等の領域において社会的弱者の視点で捉えられることの

多かった老年学に、「人間の潜在能力を生涯にわたって拓く」教育の本質を加えた「教育老年学」は、1970年のミシガン大学の教育学大学院プログラムが出発点である⁽¹⁾。「教育老年学」は、エイジングと社会を包括する社会老年学と生涯学習論を繋ぐ老年学の一つといえる。本研究では、教育老年学の課題を美術教育の視点から検討する。

教育内容とは、文字通り教育する内容であり、指導者側の教育目標と密接に関係する。新学習指導要領解説において資質・能力が一層強調されている昨今、「教育内容は資質・能力である」というその見方に、筆者は共感する。本研究においては、教育内容を「～できる力」という観点から考察する。一方「何を教えたのか」と「何を学んだのか」という教育目標と学習者の受け止めは、ずれを生じるのが常である。指導者が創り上げる学びの場の力学は、教育内容をどう押さえるかで変容する。本研究では、特に教育目標としての教育内容の側面を論じるだけでなく、「学習者の気付きと習得内容」に着目し、その本質的な教育内容を検討する。

筆者は近年、どの年代層においても語るように描く「記憶画 Memory Drawing」による表現力の伸長を図る取組を構想、展開している。本研究の目的は、高齢者を対象とした公開講座及びデイサービスにおける2つの実践を、教育内容という観点から考察し、老年教育における適切な美術教育内容を論考することである。

(2) 先行研究

教育老年学、生涯学習に関する先行研究として、堀薫夫と森玲奈の言説に着目する。堀は「教育老年学の構想—エイジングと生涯学習—」(1999)、「教育老年学の展開」(2006)、「教育老年学と高齢者学習」(2012)を記し、日本における教育老年学を牽引してきた。その主張は、高齢者と生涯学習の問題を、エイジングと成人の学びとしてより根本的な次元から結び付けて、老いの価値を探る。先述の3冊目の著書では、「教育老年学」と「高齢者学習」が並列で記されている。時代の変遷の中で、「教育」

概念から「学習」概念への移行を、ここに見ることができる。

堀は、「多くの高齢者大学や高齢者教育などのプログラムやカリキュラムには、類似性がうかがえるという。それらの理論的根拠という点では、まだ十分な検証がなされていない。」という。「いかなる学習内容を、いかなる根拠をもとに組まれることが求められているのだろうか。あるいは高齢者自身は、いかなる学習内容を望んでいるのだろうか、高齢者教育においては、学教教育における学習指導要領にもとづくカリキュラムのような、フォーマルに『学ぶべき学習内容』は存在しない」と見解を示している⁽²⁾。つまり、様々な高齢者施設、シニア大学、アートスクール等で展開されている高齢者の学びは、類似性を認められるが、未だ理論的な体系化には至っていないことを示唆する。

さらに堀は、人生は第一期「依存と未成熟の時期」第二期「自立と成熟と社会的・家庭的責任の時期」第三期「自己実現や自己成熟の時期」第四期「再度の依存や老衰、死を身近に感じる時期」に分けられ、人生の第三期に集約的に学習を提供することの重要性「サード・エイジ概念」(ラスレット、1987)を紹介する。これらは実年齢ではなく主観的年齢が重要となる。実際に、絵画や音楽などの芸術の領域では、高齢期においてこそ開花する芸術的表現があり、「オールドエイジ・スタイル」と呼ばれている⁽³⁾ エイジングを高齢期の芸術的表現を高める(enhance)と捉えている。

近年、教育学が学校教育に特化し、老年学がメディアライゼーションの波を被る中で、両者を繋ぐ教育老年学の今後の展望を、堀(2017)は「一般市民向け教育と高齢者教育の接続」、「後期高齢者への学習支援の可能性」、「高齢者教育の目標論」の3点に集約して主張した⁽⁴⁾。

森は『「ラーニングフルエイジング」とは何か—超高齢社会における学びの可能性—』(2017)において、学び続ける人々と社会に関心をもち、「エイジング」に関する諸問題を生涯学習の課題として捉え直す⁽⁵⁾。特に10章の「多世代共創社会に向けた

ワークショップ」は、多くの示唆に富み、ワークショップという活動形態が日常に定着してきたことを指摘する。また、制度的な学校教育と制度的でないゆるやかな形式をもつ学校外教育を「フォーマル学習」と「インフォーマル学習」として対比する。これらは、老年教育が制度化されていない参加型学習スタイルの中で展開している現状を示唆する。学ぶ気持ちがあっても、学ぶ場に行き着かない高齢者の存在も想定することができる。

以上の先行研究は、今日的な教育老年学に関する成果と課題を鋭く突いており、幅広い教育学的観点、及び高齢者の学習課題・学習手法が採り上げられている。しかし、学びの場で検討されている具体的な教育内容については言及されていない。

老年の美術教育に関する先行研究は、少数であるものの1) 奥西真由子「高齢者美術教育の可能性ー老人介護施設の粘土遊び実践に関する一考察ー」(2006)、2) 奥西真由子「同一共同制作のインスタレーションによる試みを通してー」(2010)⁽⁶⁾、3) 中条秀樹「もう一つの美術教育ー老人デイサービスセンターにおける造形教育ー」⁽⁷⁾が挙げられる。

奥西の問題意識は、高齢者の「生きがいと学び」にあり、高齢者の欲する表現活動の具体的内容を「1 楽しみ、2 コミュニケーション、3 自分の経験を再構成する、4 五感に刺激を与える」の4 観点で簡潔に分類している。しかし、粘土によるワークショップ実践「テーマ：アートを楽しもう！大切にしたい気持ちをかたちにあらわそう」においては、具体的に高齢者の習得するスキルとマインドの両側面について、どのような力の習得を想定しているのか読み取りにくい。奥西は更に2) の実践において、「作品を再構成することで一人の力では作り出すことの出来ない」コミュニティアートという観点から「うかぶオブジェ」「きらめくブラインド」という共同制作の手法を用いている。これらのインスタレーションの醍醐味は情意面での教育的効果を生むことを想定できる。

中条はデイサービスにおける紙版画の3 実践(「カタツムリの実物版」「切り取り紙版画」「抽象版画」)

を、研究対象として掲げ、用具の準備等についての細やかな配慮とその創作プロセスは、高齢者の実態に合わせて適切に構成されている。

これらの先行研究は、本研究の「老年教育における美術教育内容」の観点において、教育内容が明確に示されているとは言えず、どのような力の伸長を目指しているのか、共有化には更なる読み取りが必要である。

(3) 研究の方法

本学公開講座にて2017年11月に実施した「記憶画講座～絵日記のように描く 残したい記憶～」及び東京都足立区内の通所介護施設において2017年3月～翌年2月に11回に渡って実施した「記憶の旅」ワークショップを研究対象として分析・検討する。

(4) 問題の所在

- 教育老年学という枠組は、老年教育における美術教育内容にどのような示唆を与えるか。
- 記憶画の公開講座、及びデイサービスにおける教育内容は何か。
- 老年教育における適切な美術教育内容の体系化のためには、どのような指標が挙げられるか。

2. 記憶画公開講座の教育内容

次に、筆者と新見睦氏⁽⁸⁾による手本を用いた記憶画公開講座の実践と、その教育内容について検討する。

(1) 東京未来大学公開講座「記憶画講座～残したい記憶 絵日記のように絵と言葉で描く～」の構想

筆者は、これまで記憶表象を「形象」と「感性」でとらえ直し、記憶画を鑑賞題材の認識の上昇やコミュニケーションのツールとして活用する方策を検討してきた。内的で不可視の記憶を可視化するプロセスは、美術教育のイメージ表象の問題と深く関わり、表現力の根幹を成すと捉えている。

本講座の構想は、2017年1月に遡り、記憶画家の新見睦氏の協力を得て進めた。対象設定は60歳程度であるため、自分の記憶表象を自力で表すこと

第1回 記憶画講座
～残したい記憶 絵日記のように絵と言葉で描く～



「太陽がいっぱいの縁側」
新見睦「私の記憶画 描き残したい昭和 第一集 (2014) 47頁より」

お年寄りの方の記憶は、次世代に伝えたい財産です。本講座は70歳から記憶画を描き始めた新見睦氏をお招きして、絵のお話や描き方のコツをうかがいます。実際に画材に触れて、伝えたい記憶や原風景について語り合い、描く面白さを味わいます。

◆日時：11月24日(金) 13:30～16:00 13:00受付開始
◆場所：東京未来大学 図画工作科 (B棟122室)
◆講師：高橋文字 (東京未来大学専任講師)
新見 睦氏 (記憶画家)
◆対象：足立区・近隣区在住・在勤の60歳程度
◆定員：30名 (事前申し込み・先着順)
◆参加費：1,000円

図1 公開講座案内チラシより



図2 プロセスのわかる当日配布資料(部分)

は難しいことから、教育内容については検討を重ねた。最終的に、受講者が取り組みやすい手本を設ける形で実施することにした。講座名は「残したい記憶—絵日記のように絵と言葉で描く—」とし、特に高齢者に身近な日記のイメージを加味した。チラシに掲載した主な活動の流れは「①記憶画家 新見睦さんの作品画像を見ながら懐かしい昭和の時代の話聞く。②新見さんの作例を基にして描く。③高橋

が伝えたい原風景について解説後、画材を選んで象徴的に表す。④参加者で共有する。」というもので2時間半に盛り沢山な内容であった。当日は、A4実物大の下描き図と新見氏の記憶画の段階毎な変化がわかるカラー資料を準備した(図2)。

地域貢献として知的な財産を地域に還元する足立区生涯学習センターと共催する第1回公開講座であった。広報・受付業務はセンターが担当し、11月5日付の区の広報紙「あだち」に募集内容が掲載され、12名の参加を受付けて実施に至った。

(2) 記憶画講座の実際

平成2017年11月24日当日は、首都高速道路の

表1 記憶画スライドの詳細

記憶画講座 東京未来大学・足立区生涯学習センター共催
スライド 昭和20年代の墨田区寺島町

0		スライドトップ
1	1943	記憶のはじめ、伊東さんのおじいちゃん
2	1944	墨田区寺島町昭和20年代の俯瞰
3	1945	お化け煙突の変化
4	1949	戦災の焼け跡と生活のすべ
5	1948	木造家屋の建築ラッシュ
6	1949	年末の大掃除
7	1950	線路工夫の唄
8	1950	メガネのどんちゃんの紙芝居
9	1950	楠木は残った
10	1951	ヨイトマケ、復興の槌音
11	1950	雨の日は唐傘で登校
12	1951	ありがとう大正湯
13	1951	向島小倉別邸のギンヤンマ
14	1951	太陽がいっぱいの縁側
15	1952	大工さんの鉋削りと墨壺の線引き
16	1952	仕事が終わって銭湯で汗を流す
17	1952	食用カエルを捕る
18	1952	物干し台のある風景
19	1952	縁台将棋
20	1952	魚屋さんのお勘定
21	1952	洗濯はせんたく板で
22	1952	下町、墨田区寺島町の小川
23	1952	東武線沿線の小川でドジョウをとる
24	1953	広大な水辺荒川放水路
25	1953	お手玉はおもしろい
26	1953	障子紙の張り替えの日
27	1953	お父さんの匂い
28	1953	大好きな卵かけご飯
29	1953	火の見やぐらの消防士(更新)
30	1952	予防注射
31	1946	訪問先のあいさつ
32		スライドエンド (手を振るイラスト)



図3 記憶画トークの様子

事故渋滞で新見夫妻の到着が遅れたものの、会場設営は順調に進み、左棚壁面に新見氏の記憶画原画を50点展示し壮観であった。懐かしい昭和を身近に感じることができた。2名の欠席者については、受講料を既に納入済みのため、資料を後日送付とした。受講者は50代から80代まで幅広く、早めに到着し、高齢者の講座であることを実感した。

新見氏の墨田区寺島町の記憶画スライド(表1)を交えてのトークは、和やかに40分程行い、受講生は懐かしい昭和の日常の一コマ一コマに見入っていた。受講者の関係性づくりの点から簡単な自己紹介と絵から思い出されたエピソードなどを、紹介できるとよかったが、時間の関係で直ぐに描画活動に入った。

始めに新見氏よりこの作画の主題「福島の秋 午後の一服(昭和20年):疎開先の福島県伊達郡桂沢村にて、稲刈りは終り田んぼにはわら束が立つ。農作業は一休み お茶と梅干しで一服。ご近所が通りかかる。はいらんしょ いっぷくしてがんしょ〜と呼びける。戦争が終り平和が戻ってきた心温まる情景」(画中に筆ペンで記載)の説明があった。特に、形態だけでなく、この記憶画にこめた心情に着目す

ることは重要である。次に、実物大に準備した下描き図を見ながら構図を取る。用具を持参した受講者が多く、新見氏の彩色の方法に習って、鉛筆で陰影を付けた後、クレパスや色鉛筆で青、黄色、茶色と色を重ねながら、彩色を進めた。(図4-2、4-3)

受講生は、重色の学びが大きく、熱心に色を重ねていた。しかし、「クレパス」の扱いについては、細部を思うように描けない違和感があったようである。太巻き「クレパス」は、柔らかい描き心地で、紅葉の葉などを実物大に描くには、重色がやりやすく適しているが、細部描写は、「色鉛筆」もしくは細部を描きやすい細軸の「オイルパステル」の方が適していることを確認した。

A4大の画用紙の制作は、予想よりも時間を要して、最後に予定していた高橋の記憶スケッチメモは解説のみ行った。合間にお茶を飲める準備をしていたが、ほとんど休憩を取らずに没頭した。高齢者対象であったため、時間配分等の運営については課題が残った。共有を割愛し、アンケート記述で補足し、終会となった。

(3) 記憶画公開講座の教育内容

記憶画公開講座のアンケート集計結果(回収数9/10)	
〈基礎情報 男女比〉	男2 女7
〈年代別〉	50代1名、60代2名、70代5名、80代1名
アンケート指標: 1(不満) 2(少し不満) 3(やや満足) 4(満足)	
〈全体的な感想〉	3が1名、4が8名 平均3.80
〈講義内容〉	3が2名、4が7名、平均3.78
〈講師〉	4が9名。平均4
〈配布物〉	3が1名、4が8名、平均3.8
〈受講環境〉	4が7名 無答が2名
〈開催曜日、時間、回数など〉	1が1名、3が4名、4が4名 平均3.22
不満の内容は、継続開催でない点であった。	



図4-1 受講者作品例(下描き)



図4-2 受講者作品例(青で陰影をつける)



図4-3 受講者作品例(黄色、茶を重ねる)(筆者撮影)

〈具体的な意見〉

- 初めて記憶画という言葉にもふれ、楽しめました。
- 初めての経験でしたが、夢中になってしまって、あっという間の時でした。
- パネルを最初に見てなつかしく、こういう時代もあったなと 思い出しました。
- 年齢にあっていて昔をなつかしむことができたと共に残すこと（絵に書いて）もできることを知る。
- 重ねるとおもしろい色がでることを知りました。
- 絵を書く事がこんなに楽しかったのはひさしぶりでした。参加して良かったです。
- もっと時間が欲しかったです

〈その他の意見〉

- ・引き続きやってみたい
- ・色えんぴつ画の描き方を教えてください。

上記のアンケート結果より、各項目の平均が 3.8 を示し、満足度の高い講座であったことが伺えた。特に、新見氏の記憶画鑑賞を楽しんだ心情的な満足感、記憶を絵で残すことができるという気付き、色

を重ねていく技術的な学びを確認することができた。

以上のことから、記憶画に関する公開講座の教育内容は、新見氏の記憶画の魅力と重なり、具体的には①近景、中景、遠景によって場を印象的に表す力 ②重色の効果を知り、色合いを工夫して表す力 ③場面に込められた詩情を感じ取り表す力の習得と判断した。

3. デイサービスマemory画ワークショップの教育内容

ワークショップは、一方的な知識伝達スタイルではなく、自ら体験してグループの相互作用の中で学び合い、創り出す参加体験型のグループ学習である。2017年3月～2018年2月（6月を除く）に渡って、

表 2 ワークショッププロセス表

workshop/process	A Daycare	No.6	date:2017-9-12 13:00 ~ 14:30
Contents	Matirial	Teaching Act	Learner
バスの画像を基に、回想することができる。樹木の雰囲気、強弱の筆致で表されることを知り、ストロークを大切に描くことができる。色を選び、その重なり効果を感じながら模様をつくることできる。	Prepare PC	Introduction ★雨上がり 泥が跳ねあがってしまう話など ★レトロなボンネットバスの画像	N: しっぱねの話もとてもニコニコして笑顔で聞いている。 NA: バスの構造の話はニコニコ、 : 回想 漆塗り : 回想 材木屋さんで仕事免許をとらせてもらった話、三輪車トラックがすぐ倒れてしまう話
	A4 画用紙・色コンテ ハガキ大画用紙 色コンテ	1 Activity ★樹木の画像 木を描く 2 縞やチェックの模様づくり さらに色の組み合わせを試みる	NA: しなやかな木の枝を描く。「びわの木」だそうだ。 SI: 最初の小さな木から、後半はのびのびと生命の木を表す。 YO: 線質の美しい木を描く HI: の楽しいぐるぐるを取り上げ、気持ちの込められた表現の大切な意味を共有することができた。
		Reflection それぞれの作品の味わいを共有 賞揚 スタッフの皆さんのサポート、声かけがはっきりとわかりやすく伝えて絶妙	みなさん楽しそうに見合い認め合う。
	Clean - up		

足立区内のデイサービスで行った実践を検討する。

(1) デイサービス記憶画ワークショップの構想

2016 年末にデイサービスを管轄するヒューマンサポート株式会社の介護事業部に、記憶画ワークショップを実施したい旨相談し、2017 年 2 月に初回実施の運びとなった。高齢者の記憶を地域資源と捉える、高齢者及び周囲の家族が話すのと同じ様に記憶表象を描く願いを含めた試みとして提案した。ワークショップ会場は、個人宅を改装したリビングにある大テーブルであり、午前中の入浴、昼食後の 13 時から 14 時半で計画した。

(2) ワークショップの実際

計 10 回のワークショップは、

導入 (テーマについての回想、共有)

→ **活動 1** (手慣らし的な描画)

→ **活動 2** (本活動)

→ **ふりかえり・共有**

の流れで行った。

表 2 は、教育の 4 問題領域を意識して、筆者が作成したワークショップの計画、プロセスを示した表である。左側に教育内容 (Contents) があり、次に教材・材料 (Material)、次に授業刺激としてのファシリテータの働きかけ (Teaching Acts)、最後に学習者 (Learner) の受け止めを記している。ワークショップ実施前に柱であるコンテンツを確認し、その実現のために、必要な材料、流れ等を整理できる。

表 3 A デイサービスワークショップ実施日とテーマ

下記に示した通り、11 回の活動は、様々な描画材を用いて造形感覚の伸長を図った。

- ① 2017. 3. 7: 記憶画鑑賞とサインペンによる創作
- ② 2017. 4. 18: 学生相手の回想と多色色鉛筆創作
- ③ 2017. 5. 22: 回想と色鉛筆による創作
- ④ 2017. 7. 28: 回想と水彩画による創作
- ⑤ 2017. 8. 22: 回想と 93 色色紙コラージュ創作
- ⑥ 2017. 9. 12: 「バス」回想と樹木を描く創作
- ⑦ 2017. 10. 1 「ネコ、犬」回想と色鉛筆創作

- ⑧ 2017. 11. 16: 「秋の味覚」回想とクレヨン画創作
- ⑨ 2017. 12. 21: 「色」をテーマに回想と水彩画創作
- ⑩ 2018. 1. 25: 「鳥」回想と色コンテ創作
- ⑪ 2018. 2. 13: 「絵カード」と色鉛筆画創作

導入時の回想のテーマを毎回設定することで、新鮮な刺激となり、そこでの発話を受容して、次の活動 1、2 に繋げていくことは有効であった。

(3) 教育内容の推移

これらのワークショップ実践は、その教育内容の推移から以下の I～III の 3 期に大別できた。「I」内は実践後の吟味した教育内容である。

I 3 月～4 月 「写真や絵と共に、想起された記憶の断片を描くことができる」

手慣らし (略画の中から気に入ったものを多色色鉛筆で描く) 後、トーク共有、記憶の断片を描くことを行った。例えば、I さんはいつも学校帰りに見ていた木を描こうと苦戦していた等、参加者の実態にそぐわない教育内容であった。

II 5 月～9 月 「テーマの回想では、進んで話し、聞き合いながら参加者の物語を共有できる。創作では、多色色紙や水彩画、クレヨン画のよさを味わって進んで描くことができる。」

導入の回想共有を大切にして時間をかけたことで、場がなごみ、個別の話の内容から表現につなげていくことができた。①期に比べ、固さがとれ、なごやかに進行した。認知症の傾向もあることから、毎回異なる課題ばかりでなく、3 ヶ月程のスパンで、継続して創り上げる課題の提案をスタッフの方から得て検討した。

III 10 月～2 月 「猫や犬、果物、クリスマスカラーなどの各テーマについて、進んで想起した記憶を言葉で表し、色鉛筆、水彩、クレヨン等の特性を感じ取りながら、自分なりのテーマを表すことができる。」

デイサービスの利用者の高齢者にとって、「記憶



図7 デイサービスでの創作風景



図8 葉書大の木版画の板に描く色鉛筆画

画」を自らが描くことは難しい状況であった。毎回テーマを変えて、回想的な話を共有することで記憶画の主題を共有することができた。これらを、記憶画ワークショップの第一段階と捉えた(図7)。

(4) 協働的記憶画の試み

第2回目には学生4名が参加し、聞き手役となり、提示された記憶を表して交流した。予想以上に高齢者が交流を喜び、深い関わりが生まれた。もっと描けるようになりたいという学生の刺激にもなり相乗効果が見られた。

Fさんは、忘れてしまって「描けないわ」と手が動かない様子も多く見られたが、必ず決まって行きつく特徴的なドローイング等を確認した。今後は、これまで獲得してきた技能を見極め、本人の表したい表現主題を探っていくことが課題である。

4. 創作の心地よさを生み出す素材との一体感

老年に限らず、筆者が着目する「素材との一体感」は、あらゆる創作活動における材料、用具とのフィット感を示す概念である。左記のⅠ～Ⅲの12ヶ月の学びの中で、材料や用具の扱いが少しずつ慣れてきた状況とも言える。Hさんは、暖色系が好きで、クレパスや色コンテを大きなストロークでのびのびと描く。構想に悩み、手足が萎縮している様子はこの対極にあるといってよい。学校教育の図画工作・美術の授業においても、この指標が高いが低いかは児

童や生徒の様子から一目で感得することができる。

老年期は、視力や適応時間など生理的な機能が低下するため、それらを配慮した運用が必要である。後期高齢者対象であるデイサービスにおける実践では、特にその必要性を感じ、素材、色、形の操作、創作が心地よいと感じられるプログラムに変容させていった。教育内容はプログラムと一体であり、微細な色や形の共有となる。高齢者の身体状況に合わせてそれらを詰めていくことは、小中高の学習指導要領の内容事項をさらに吟味していくことと重なる感覚であった。

堀は、高齢者教育学(ジェロゴジー)の原理は、成人教育学(アンドラゴジー)の原理よりはむしろ子ども教育学(ベタゴジー)の原理に近いものがあると指摘する。これらは実践的な感覚で頷けるものである⁽⁹⁾。

図8作品の作者である87歳の高齢者Sさんは、当初は「難しい」を連発してなかなか活動に入っていくことができなかった。しかし、第11回目の講座では、「同じ色ばかりじゃつまらないもの」と言いながら、色鉛筆を選び終始集中して活動に入り込んでいた。この「同じ色ばかりではつまらない」という認識は、「たくさんの色があった方がよい」という認識と微妙に異なる。ここでSさんが得た色鉛筆との一体感は、身体を通した描画材の特性の習得、「素材の身体化」といえるものであり、学びの質的変容を示していた。

5. 結論

老年教育の美術教育内容に関する問題の所在に関して、以下の結論を得た。

- 教育老年学は社会学的な大きな枠組みをもち、ポジティブエイジングという広い視野から老年教育を捉えることはできるが、筆者の問題意識である美術教育内容という点では、理論的な体系化には至っていない。
- 記憶画に関する公開講座の教育内容は、整理すると、手本を用いた遠近感と重色の技能の習得を目指したものであった。詳しくは①近景、中景、遠景と分けて場を印象的に表す力 ②クレヨン等の重色の効果を知り、色合いを工夫する力 ③場面に込められた詩情を感じ取り表す力であった。

デイサービスにおけるワークショップの教育内容は、「色や形の組み合わせやタッチの仕方、主張のある心地よい表現が生まれることを体感する」と総括した。特に、心情的な「上手⇔下手」を基軸とした既成概念をほぐす必要があり、素材や描画材を用いた表現の心地よさを体感するプログラムを組むことで、描画材との一体感が生まれ、それらの一体感は微細な方法論の獲得をもたらした。
- 老年教育における適切な美術教育内容の体系化のためには、色と形の造形要素だけでなく、創作の心地よさを生み出す「素材との一体感」を重要な指標として示した。

謝辞

快くワークショップ実践をご了承いただいた株式会社ヒューマンサポート「灯〜あかり 綾瀬デイサービス」関係者の皆様に感謝申し上げます。

註

- (1) 堀薫夫「教育老年学の構想—エイジングと生涯学習—」学文社、1999、p3 ハワード・マクラスキーらによる。1976年には、雑誌 *Educational Gerontology* が発刊され、以後エイジングと教育

のかかわりを扱った論考が寄せられる。この雑誌の創刊号では教育老年学は「高齢者および年をとりつつある人びとのための、あるいは、彼らについての教育的作用の研究・実践を意味する」とデビット・ピーターソンによって定義されている。

堀薫夫「教育老年学の展開」学文社、2006 「はじめに」参照

- (2) 堀薫夫「教育老年学と高齢者学習」学文社、2012、pp.27-28
- (3) 堀薫夫「教育老年学の展開」pp.98-100.
- (4) 堀薫夫「教育老年学の展開と課題」『老年社会科学』、38号、2017、pp.459-464
- (5) 森玲奈編「『ラーニングフルエイジング』とは何か—超高齢社会における学びの可能性—」、2017、ミネルヴァ書房
- (6) 奥西真由子「高齢者美術教育の可能性—老人介護施設の粘土遊び実践に関する一考察—」、『美術教育学』、第27号、2006、pp.79-91 5) 奥西真由子「同一共同制作のインスタレーションによる試みを通して—」、『美術教育学』、31号、2010、pp.163-174
- (7) 中条秀樹「もう一つの美術教育—老人デイサービスセンターにおける造形教育—」、第49回日本美術教育研究発表会、2015、日本美術教育連合
- (8) 新見睦「私の記憶画 描き残したい昭和 第一集 戦中戦後のこども」、工房にじのかけはし、2014
- 新見睦「私の記憶画 描き残したい昭和 第二集 昭和の生活そして平成へ」、工房にじのかけはし、2015
- (9) 堀薫夫「教育老年学の構想」、p97
- 日本の老年医学では、65歳~74歳までを「前期高齢者」、75歳~84歳までを「後期高齢者」、85歳以上を「超高齢者」と呼んで区別している。総務省の人口推計において、65歳以上を「老年人口」とする区分が使用されている。
- (たかはし ふみこ) 東京未来大学